三波分団

狙う標的は「全国制覇」

The fire brigade SANNAMI

三波分団全国大会へ

消防団。それは「自分たちの町は自分たちで守る」という江戸時代の町火消から続く「火消し魂」の精神を受け継ぐ有志で構成された組織だ。その消防団員が、消防用機械器具の取り扱いや操作方法について定めたものが「消防操法」といわれ、「ポンプ車操法」と「小型ポンプ操法」がある。消防団員は日ごろから消防操法を訓練し、技術の向上と消防人としての心構えを培っている。

その訓練の成果を発表する場が「消防操法大会」である。6月24日の町消防訓練大会ポンプ車操法の部で優勝、7月29日の県消防操法大会で大会3連覇を果たして、2年に一度開催される全国大会への切符を手にした分団が三波分団だ。

ポンプ車操法は、20mのホースを3本つなぎ合わせ、標的を放水で倒すまでの所要時間と、隊員の「規律・節度」「敏しょう性」「確実な動作」「安全性」「チームワーク」などが審査される。

その強さの秘密は

三波分団のポンプ車操法は「攻める」操法である。守りに入ることなく、常に攻めるからこそ隊員の士気は高い。そして三波分団の大きな特徴が「規律・節度」だ。以前、全国上位の分団を視察した際、その「規律・節度」のレベルの高さに圧倒され、さらに上を目指すようになったという。

基本となる「規律・節度」を高めた三波分団は、その他の審査項目でも減点が減り、ミスした場合でもカバーできるようになった。一発勝負の大会では、大きなミスは許されないが、小さなミスは全員でカバーできる。以前に比べ増しているというその安定感が、県大会3連覇、全国大会連続出場という成績に繋がっている。

2年前、横浜市で行われた全国大会に出場し、準優勝となった三波分団が次の目標としたのは、もちろん「全国制覇」だった。

夢ではない全国制覇

2年前と同じメンバーで挑む今回の全国大会に向けた三波分団の訓練は、昨年の12月から始まった。5月からは、ほぼ毎日2時間以上の訓練をこなしてきたという隊員のレベルは、準優勝した前回大会よりも当然上がっている。選手自身はもちろん、周囲も全国制覇が夢ではないことを実感し、日々の訓練にも自然と熱が入る。

まだまだやることがある

規律・節度や動きについては、まだ甘いことを実感している。走り方ひとつ取っても、理想の形ではない。大会までに修正するか、今のままでいくかという選択も迫る。大会に向けてまだまだやるべきことがたくさんある。

そして、何より大切な精神力。県大会を楽勝ではなく、僅差で勝ち上がったことも、周囲や隊員の気持ちを引き締め、精神力、チームワークを強くした。

隊員にポンプ車操法の魅力を尋ねた。しばらく考え「わからない」と答えた隊員は「その答えを見つけに兵庫に行く」と力強く語ってくれた。

操法にかかる時間はわずか8分弱。今までサポートしてくれた家族や分団員、指導してくれる消防署員、応援してくれるたくさんの人のために、そして誰よりも努力を重ねてきた自分自身のために、8分間にすべてをぶつける。

10月19日、兵庫県三木市で開催される全国大会まであと1カ月余り。三波分団は「最高の操法」で全国24000分団、90万団員の頂点を目指す。

7月29日に行われた県大会終了後、応援に駆けつけたみなさんと記念撮影

2006.10.19

三波分団全国制覇へ／兵庫県三木市で開催される全国大会まで残り1カ月余り。

ポンプ車

平成10年式のボンネットタイプポンプ車。三波地区は狭い道が多いために、車高の高いキャビン型ではなくボンネット型が必要だった。能登町16の分団でボンネット型のポンプ車は三波分団だけだが、全国大会では約半数がボンネット型ポンプ車とのこと。

日々の訓練や、数々の大会に出場したこのポンプ車の走行距離は約15,000㎞となった。消防ポンプ車としてはかなりの距離を走っているが、まだまだ現役だ。

「本番でも頼むぞ」という5人の強い想いを乗せたポンプ車。入念に整備され、全国大会に備える。

4番員 山田 久就 やまだ ひさなり

32歳、波並地区在住。平成11年入団。平成13年より1番員を担当し、平成15年より4番員。

ポンプ車を操作する4番員は、常に周りを見渡し、冷静に対応する強い精神力が求められる。審査員にもじっくり見られるために、プレッシャーも大きい。

周りから「一番操法を知っている」といわれる山田隊員は、常に操法要項を研究している。指導する消防署員とも意見がぶつかることも多い。その操法に対する強い気持ちは、他の隊員の「絶対的な存在」となっている。

試合中は「体が操法を覚えているので、頭の中は真っ白な状態」という山田隊員。兵庫で6年間やってきたことのすべてを出し切る。

3番員 山谷 聡司 やまたに さとし

27歳、矢波地区在住。平成13年に入団し平成15年より3番員を担当。

第1線延長時は吸管投入作業をし、第2線では第1・第2ホースを延長する3番員には、スピードと安定感が求められる。

「3番員は細かい作業が多いので減点されないように注意している」と話す山谷隊員。全国大会への意気込みを尋ねると「とにかく優勝するのみ。選手一人ひとりが出来ることをすれば、優勝は見えてくる」と話してくれた。また、「今のメンバーは信頼できる仲間」と話す。

全国大会に向け頭を丸めて気合いを入れた山谷隊員は、「攻め」の操法で優勝を狙っている。

2番員 竹下 浩市 たけした こういち

27歳、矢波地区在住。平成13年に入団し平成15年より2番員を担当。

第1線では、第1・第2ホースの延長。第2線では、第3ホースの延長と放水を行う2番員。タイムに直結するため、ポンプ車操法の要ともいわれ、スピードとスタミナが必要なポジションである。

5人の中では一番足が速く馬力もあるという竹下隊員は「試合ではとにかくテンションを上げるようにしている」とのこと。

全国大会では「三波分団が全国制覇すること、そして日本一の2番員になりたい」と意気込みを語る竹下隊員。「最高の操法」で「最高の結果」を見せてくれるに違いない。

1番員 田邊 直樹 たなべ なおき

28歳、波並地区在住。平成15年に入団し、平成16年より1番員を担当。

誰よりも早く標的に向かって走る1番員。「1番員が決まらないとすべてが流れていかない」といわれ、「自分がミスしたら負け」という強いプレッシャーもある。

現在は、前回ミスをしたという止まる位置の誤差をなくすようにと訓練を繰り返している。

竹下、山谷隊員に誘われて入団し、山田隊員に1番員を教え込まれたという田邊隊員。「とにかくミスをしないように。そしてこのメンバーで優勝したい」という想いは強い。兵庫県では、三波分団の特攻隊長として誰よりも早く標的を倒す。

指揮者 天幸 治嘉 てんこう はるよし

42歳、波並地区在住。29歳で入団し、操法歴は14年目。1番員、4番員、3番員を担当して平成15年から指揮者。

「集まれ」「乗車」「操作始め」など、隊員に号令をかける指揮者。規律・節度を重視する三波分団の操法において、指揮者もまた重要な役割をもつ。指揮をするうえでの心構えを聞くと「指揮者はミスをしないことが当たり前、とにかくミスをしないように考えている」とのこと。

年齢的にも今回が最後の操法大会と自覚する天幸隊員。「最高のメンバー」で全国大会に出場できることを誇りに感じている。「個人個人の能力だけなら日本一」というメンバーをひとつにまとめ、有終の美を飾る。

5人の男と1台のポンプ車が織りなす物語